

演目解説

1. 『扇桜』(せんおう)

桜はわが国の誰からも愛され、国を象徴する花として日本の国花に制定されています。毎年春になると桜を待ち焦がれる人々の心は揺れ動きます。

春の到来、桜の開花から徐々に花卉は開いていきます。人々はそれぞれの思いを抱きながら満開の時を迎え、大きな桜の樹木の下に集い再会を喜び、そして新たな出会いに胸を膨らせます。満開時の高揚感は何にも変えがたく、心は至福の境地で満たされます。桜の美しさに見入ったり、浮かれて戯れたりしています。やがて花びらは葉桜となって散ってしまいますが、年月は繰り返され再び桜の時期を迎える予感を抱かせて暮になります。

日本舞踊家にとって一番馴染みの深い小道具である扇子を巧みに扱いながら展開される、均整と調和の取れた作品です。

2. 『栗餅』(あわもち)

江戸時代、栗餅はその売り方も面白く、搗き上がった餅を手でつかみ、五本の指の間から同じ大きさの団子を四つ出しては、それを二メートル位離れた皿に飛ばし黄粉につけ売っていました。「栗餅の曲搗き」と言われた搗き方も威勢良く合図を交わしながら杵を投げ上げたり、そのパフォーマンスも多彩で、空中を飛びかう団子を見物に来る客も多かったようです。

この作品はそうした当時人気のあった栗餅の風俗を舞踊にしたもので、江戸情緒たっぷりの陽気などかきに加え、六歌仙の踊り分けや団扇太鼓の踊りも軽妙で楽しい作品です。

3. 『関寺小町』(せきでらこまち)

小野小町には様々な伝説があり、日本舞踊以外でも能、浄瑠璃、歌舞伎等で取り上げられています。かつて美女と謳われた小野小町が百歳を迎え、逢坂山の関寺近くに侘び住いをしています。杖をついて歩く自らの姿が水に映るのを嘆くほどその身は衰えています。

華やかであった昔、深草少将を毎夜訪ねさせたといわれる伝説百夜通いを回想し、その罪の深さを懺悔します。一転して若き日の忘れかけた恋の睦言に夢を馳せながらひとさし舞い、やがて現実に戻り身繕いをして老いて弱った姿で関寺の庵へ帰っていくという、寂しさが漂いながらも典雅な曲になっています。

『扇桜』舞台写真

